

# 和楽器ユニットおとぎ

## 「組曲古事記第二番」～大国主命篇～

木場大輔 作曲／川村旭芳 語り文 & 琵琶歌作詞・節付

### I. 兎の予言

因幡国の沖の島にいた兎が、海に住むワニを騙して一列に並ばせ、その背中を跳んで本州に渡ろうとするが、渡りきる寸前でつい口を滑らせ、怒ったワニに皮を剥がれてしまう。そこへ通りかかったのは、八上比売(ヤガミヒメ)に求婚に向かう途中の意地悪な八十神たち。八十神の言う通りにすると傷が更に悪化し、兎が泣いていたところ、八十神の荷物を背負い、従者として遅れてやって来た大穴牟遲神(オホナムヂノ神=のちの大国主命)が、傷の治癒法を教えてやる。兎は心優しい大穴牟遲神こそが八上比売と結ばれるであろうと予言する。兎がワニの背中を跳んで海を渡る様子を、軽快な笛の旋律で表現。兎の企みが露見し、ワニに皮を剥がれてしまう場面を、胡弓の低音や琵琶、十七絃が想起させる。兎の悲哀と、大穴牟遲神が八上比売と結ばれることを予言した神秘性を、十七絃の雅楽風のパターンや胡弓の旋律で表現している。

### II. 根之堅州国

八十神たちによる度重なる迫害から逃れるため、須佐之男命の住む根之堅州国を訪れた大穴牟遲神。根の国に着くや否や、須佐之男命の娘、須勢理毘売(スセリビメ)と一目で惹かれあい、結ばれる。須佐之男命は大穴牟遲神を助けるどころか、蛇や百足や蜂の室屋に入れたり、鳴鏑を拾いに行かせた野に火を放つなど、理不尽なまでの仕打ちを繰り返す。そんな須佐之男命はやんちゃな荒くれ者で、その精神はロックのようである。あるいは断りなく娘の須勢理毘売を娶った大穴牟遲神への試練か。琵琶、十七絃、胡弓のリフに乗せて、低音が魅力の長管尺八で須佐之男命による数々の試練を描く。それらを乗り越え、根の国を脱出した大穴牟遲神は、須佐之男命の生太刀・生弓矢と共に逞しい力を手に入れ、大国主神の名を賜る。前作の組曲古事記第一番最終楽章の須佐之男命の英雄的旋律がファンファーレとなり、楽章を締めくくる。

### III. 恋の旅路

大国主命は「八千矛の神」の異名を持つ恋多き神。ある時、高志国(北陸地方)に沼河比売(ヌナカハヒメ)という美しい姫がいると聞き、遠路はるばる求婚に出かけ、家の前に着くと次のような歌の問答をする。歌詞は古事記の原文書き下しをそのまま引用し、優男が遠路をものともせず調子よく出かけて姫を口説く様子、姫のつれない態度に嘆く様子を対比させるように作曲した。

八千矛の神の命は 八島国 妻枕きかねて 遠遠し 高志国に 賢し女を 有りと聞かして 麗し女を 有りと聞こして  
き婚ひに 有り立たし 婚ひに 有り通はせ 大刀が 緒も いまだ解かず 襲衣をも いまだ解かねば 嬢子の 寝すや  
板戸を 押そぶらひ 我が立たせれば 引こづらひ 我が立たせれば 青山に 鶴は鳴きぬ き野つ鳥 雉は響む  
庭つ鳥 鶏は鳴く うれたくも 鳴くなる鳥か 此の鳥も 打ち止めこせね いしたふや 天馳使 事の 語言も 此をば

【現代語訳】八千矛の神の命は、日本国中で思わしい妻を娶ることができなくて、遠い遠い越国に賢明な女性がいるとお聞きになって、美しい女性がいるとお聞きになって、求婚にしきりにお出かけになり、求婚に通いつづけられ、大刀の緒もまだ解かずに、襲衣をもまだ脱がないうちに、少女の寝ている家の板戸を、押しゆさぶって立っておられると、しきりに引きゆさぶって立っておられると、青山ではもう鶴が鳴いた。野の雉はけたたましく鳴いている。庭の鶏は鳴いて夜明けを告げている。いまいましくも鳴く鳥どもだ。あの鳥どもを打ち叩いて鳴くのをやめさせてくれ、空を飛ぶ使いの鳥よ。— これを語り言としてお伝えします。(講談社学術文庫『古事記』次田真幸訳/以下同)

沼河比売は、戸を開けずに、家の中から次の二つの歌を返す。同じく古事記の原文書き下しを引用し、大国主命の突然の求婚に戸惑いつつも毅然とした態度で尊厳を保ち、かつ運命を受け入れる姫の心の動きと、清純な色気を表現している。

八千矛の神の命 萎え草の 女にしあれば 我が心 浦渚の鳥ぞ 今こそは 我鳥にあらめ 後は 汝鳥にあらむを  
命は な殺せたまひそ いしたふや 天馳使 事の 語言も 此をば

【現代語訳】八千矛の神の命よ、私はなよやかな女のことですから、私の心は、浦州にいる水鳥のように、いつも夫を慕い求めています。ただ今は自分の意のままにふるまっていますが、やがてはあなたのお心のままになるでしょうから、鳥どもの命を殺さないで下さい、空を飛びかける使いの鳥よ。— これを語り言としてお伝えします。

青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ 朝日の 笑み栄え来て 栲綱の 白き腕 沫雪の 若やる胸を  
そ叩き 叩き愛がり 真玉手 玉手さし枕き 股長に 寝はなきむを あやに な恋ひ聞こし  
八千矛の神の命 事の 語言も 此をば

【現代語訳】青山の向うに日が沈んだら、夜にはきつと出て、あなたをお迎えしましょう。そのとき朝日が輝くように、明るい笑みを浮かべてあなたがおいでになり、白い私の腕や、雪のように白くてやわらかな若々しい胸を、愛撫したりからみ合ったりして、玉のように美しい私の手を手枕として、脚を長々と伸ばしておやすみになることでしょうか、あまりひどく恋いこがれなさいませ、八千矛の神の命よ。— これを語り言としてお伝えします。

### IV. 出雲の宮殿

逞しく成長した大国主命は、多くの妻を娶り、子孫を繁栄させた。そして、少名毘古那神(スクナビコナノ神)や御諸山(みもろやま)におわす神の助けを受け、葦原中国を作り堅めていった。その後、高天原の天照大御神より遣わされた建御雷神(タケミカヅチノ神)に国譲りを迫られると、大国主命は出雲の地に壮麗な宮殿を建て住まうことと引き換えに、永遠に隠れ留まることを誓った。出雲では十月の神無月を「神在月」と呼び、毎年、日本中の神々が出雲大社に祀られた大国主命のもとに集い、夜ごと宴を繰り返しているとか…